

ピエロと純粹と周縁

三木直大

鈴木将久氏のこの本は、中国近代のモダニズムを再発見し、再定義しようとする試みである。しかし、読了してなお、わたしたちは中国のモダニズムとは何であつたのかの明快な答えを見つけない。国近代にモダニズム文学の大いなる達成など、存在しなかつたからである。アジアにおいて近代は、植民地主義と重なりあつている。そして、その構造は国家と地域をまたいで連鎖している。それが国民国家の成立とパラレルなものである以上、近代とは本質的にそのようなものでもある。そして文学のモダニズムは、近代的価値への懐疑がつくりだしたものである。モダニズムを文学史上の狭義の潮流ととらえるなら、西欧ではそれは第一次世界大戦の終結とともに現れる。戦争

によるそれまでの諸価値の崩壊が、モダニズム文学という表現形態を生み出した。それまでの価値とは、「神」と「近代」のコードの体系であり、それを信憑することで成立していたアイデンティティの体系である。だからこそそれは、ジョイスの「ユリシーズ」やフォークナーの「響きと怒り」がそうであるように、欧米でも周縁的な社会、多言語な社会からの声を響かせた。それは必然的に反近代を内包することになる。だが、同時にそれは、アジアにおいては市民的な個という近代の理想とも密接に結びついている。個としての近代性をいかに想像し、書くことの主体性をいかに創造するかという場所から、アジアのモダニズムははじまるのである。だから、それは都市の文学の様相を帯びる。この本の名前が、「中国モ

鈴木将久著
上海モダニズム



四六判 300頁
中国文庫／東方書店発売
[4200円]

ダニズム」ではなく「上海モダニズム」である理由はそこにある。

そう考えると、鈴木氏が「子夜」論を、この本の第一章に収録した理由がよくわかる（第一章「都市上海を語ること——茅盾『子夜』のテクストの布置」）。著者が中国近代文学のなかに見出そうとした文学のモダニズムの理想のかんりのものが、「子夜」にはあつた。茅盾の「子夜」は、マルローの「人間の条件」や横光利一の「上海」のように、「上海」を描いて、その可能性をもった作品だった。そして、「子夜」論は、著者の中国近代文学研究の出発点に位置するものでもある。わたしたちは中国近代文学に何を讀もうとするのか。それはわたしたちが現在を生き

ることどんな意味を持つのか。戦後日本の中国近代文学研究を覆っていた革命中国幻想は、とっくの昔に消滅している。『上海モダニズム』の著者と同世代の研究者が近年出した本に、三澤真美恵『「帝国」と「祖国」のはざま——植民地期台湾映画人の交渉と越境』（岩波書店、二〇一〇）がある。この二つの本は文学と映画という違いはあっても、きわめて近似した位置にある。三澤氏は、「越境」する映画人の制作した映画に「存在論的な問題の立て方」はしないことから出発する。鈴木氏も、上海モダニズムの文学それ自体を問うのではない。ハイ・モダニズムなどそこには存在しないと言いきることから出発する。では、どうするのか。そこで著者は、近年のモダニズム研究の注目すべき視点を導入する。「一つはハイ・モダニズムの相対化」である。もう一つは「ヨーロッパを頂点とするモダニズムの階層構造の相対化」である。「中国モダニズムは、中国文学史の流れからも、モダニズム文学の流れからも、二重に周縁化された存在といえる。中国モダ

ニズムを考えることは、周縁化されたマイナーな存在への注目だといえるべきかもしれない」というのが、この本における鈴木氏の立脚点になる（はじめに）。「二重の周縁化」ということにおいて、二つの本が近似してくるのは当然のことでもあるだろう。そして、この「周縁化」には、中国国民党と中国共産党のナショナリズムの覇権争いからの、そして汪精衛政権からも、二重三重の政治的な周縁化もまた想定されている。

だが、三澤氏の本にもまして鈴木氏の本から伝わってくるのは、上海モダニズムとは何かを手練り寄せようとして行きつ戻りつするアポリアと著者の悪戦苦闘である。それは、文学を「方法的概念」（三澤）として考えざることを難しと以上に、中国を考えることから出発するのと台湾を考えることから出発するのとの違いから来るのかもしれない。台湾を考えようとするとき、その前提にははじめから「越境」がある。近代台湾の知識人たちは、自分たちが何者であるから、まず問わなければならなかった。だが中国では、

「国家に従属しない個人主義を基礎におく」、たとえば羅隆基のようなりベラリストは、稀有な存在であった（水羽信男中国近代のリベラリズム」、東方書店、二〇〇七）。それが「中心と周縁」の差異であり、また「近代」と表裏一体となった連鎖する植民地主義の帰結であるとしても、誤解をおそれずに言えば、彼らは自分たちもはや「第三種人」ですらなく、「漢奸」であるとまなざされたとき、その問いに直面するのである。だから、鈴木氏のこの本の主要な部分が、穆時英論と路易士論と陶晶孫論で構成されるのは当然のことでもある。

「彼らの文学活動を現在読みなおす価値があるのは、文学的達成度の高さのゆえではなく、社会や政治の要請と切り結びつつ、近代文学を生み出すために格闘した緊張度の強度のゆえであると思われる」（「序章」）。それはどこまでも「近代文学を生み出すための格闘」であって、彼らの文学は瞿秋白の言語改革論と同じく、「国民国家」と「国語」の問題群でもあった。上海モダニズムが目指した文

学言語としての「大衆の言語」というものも、その文脈の上に浮かびあがってくるものであった(第二章「可能性としての言語―瞿秋白の言語理論」)。だから話は「上海モダニズムと中国左翼文芸が初発の段階において共通の基盤を持っていたこと」からはじまる。「一九三〇年代初頭の上海における新文学の一つの大きな課題」は、「上海では一九二〇年代に形成された都市の大衆」を「新文学の読者として獲得すること」であった。「都市大衆を描き出す新しいことばを生み出すこと」が左翼文芸とモダニズムの共有する課題であり、それが戦争によってどのように分岐していくかが、著者の関心の中心にある。そのことから、上海モダニズム論を展開しながらなお、いっぽうで著者がきわめて「正統的な文学史」論を意識していることがわかる。だからこそ、「おわりに」で「毛沢東の提起した新しい近代性」という理念が提示されるのだが、そのことの是非は、いまは問うまい。著者には、「中国的な現代主義やモダニズムの意味をもう一度確認しなおして、現

在の中国と結びつけ」ようとする研究者としての強い自己抑制と倫理意識がある(特集「遠い隣人の文学を読む」、『言語社会』第四号、二〇一〇)。ともあれ、上海という場所は中国にとって特殊である。中国全体に広げれば、中国にこの時期、「近代」などというものが成立しているはずもないが、上海という限られた場所に焦点を向けるなら、そこには租界地であるがゆえのコスモポリタニズムと近代らしきものがあつた。そして、上海は中国モダニズムの中心地であつたが、「中国の周縁」でもあつた。著者も援用する史書美の議論によるなら、上海は「半植民地」「次植民地的都会」であつた。

「中国のモダニズムとはつまるところ西欧のモダニズムの技法を用いて自分たちの現在を書くことであつた」と、鈴木氏は明確に規定する。それではまるで「中国西用論」ではないか、そうではなくて中国のモダニズムは本質主義的な達成をみないまま挫折したということではないのかと反論したくなるが、けっきょくそれは同じことを言っているのかもしれない

い。ともあれ、著者はそう言いきることでも、上海モダニズムについての考察を先にすすめる方法をつくるのである。「虚構としての中国現代」(三木直大「下之琳とオーデン」)、『三十年代中国と東西交渉』、東方書店、一九九八)などという西欧中心主義から抜けさせない視点にたつて中国のモダニズムを考えるようなことから、明らかにそれは研究を前にすすめるものである。だからといって、鈴木氏はことさらに「アジア的近代」といった理念を対峙させるわけでもない。だからこそ、この著書の中のもう一つの大きなキーワードが浮かびあがる。それが「ナシヨナリズム」である。「中国ナシヨナリズム」というやっかいなものから、いかに「上海モダニズム」を擁護するかに、著者の全力が注がれているようにすら見える。穆時英は「あらゆるイデオロギーの外側の位置に立つた」小説を創作しようとした(第三章「流通するイメージ―穆時英の小説の実験」)。では、「ナシヨナリズム」に軸足をおかない「抵抗」の拠点はありうるのか。戴望舒は、「ナシヨナリズム

への回収を慎重に避けながら、別の形で戦争への抵抗を表現するべく模索」し、「ナショナルリストイックな政治運動から離れた独自の立場から、政治運動の形式によつては届かない戦争の暴力性の一端を、詩として表現しよう」とした。彼は「単一の声によつて不安を代表する方法をとらなかつた」。「香港」という場所は、世界的反ファシズムとの交通の場であり、中国人としてのナショナルな主体を形成することなく、境界を越える抵抗を可能にする拠点としての意味を持っていた」(第四章・詩は抵抗と表現できるか——戴望舒の模索)。そして、「不透明な主体」であるしかない存在の仕方が、モダニストとしての彼らの書くことの主体性であったと

いうのが、著者の結論になるだろう。さらに、著者が路易士に見出そうとするのは、「戦時中の上海で活動したこと」が必然的に持った政治的な意味」と、「文化の隅々にわたっていた当時の政治性の意味を問ひ直すこと」(第五章・戦時下において詩はどこにあるか——路易士の詩的活動)である。路易士の『純粹詩』とは、「純粹」と相反して、いかにポリテイクスそのものであることか。「路易士の『純粹詩』は、純粹を妨げる現実の場である当時の上海の情況と切り離せない関係を結んでいる」。しかし、「日本占領下上海の路易士の活動を再考すること、それは路易士という個人の内面を探るものにはならない」。「路易士の事例は、人物の

重要性から考えても、対日協力の強さから考えても、限りなく無意味に近い」。だが、その空虚さは、彼自身が選んだ方法がもたらしたものである。彼は自らを、地上を「散歩する魚」(一九四三)に喩えた。著者は、路易士の特徴として、「ずれ」ていることをあげる。実は、それは路易士だけのことではない。アジアのモダニズムとは、けつぎよく「ずれ」ているのである。戴望舒であれ路易士であれ、東京であれ上海であれソウルであれ台北であれ、それは程度の差にすぎないのであって、「ずれ」ていることにはかわりはない。アジアにおける「モダニズム」とは、畢竟「コリアリズム」の産物であるのだ。だから、モダニズム

岸本美緒著

研文選書 31

地域社会論再考

明清史論集2 市場と貨幣・国家と社会秩序・驚く歴史家、驚く読者の三部構成で、市場論と暴力論を中心にまとめる。時代区分論と風俗論を中心とした「風俗と時代観」明清史論集1(2940円)の姉妹篇。 2940円

小林一美著

M・ヴェーバーの中国社会学論の射程

ヴェーバーへの深い洞察を基にした視点に立つて、古代から現代にいたる中国史に固有な諸問題に新しい照射を行なうポレミッ的な書。著者渾身の書下ろし雄篇。 5250円

福本郁子著

『詩経』興詞研究

『詩経』の経学的解釈を廃し、「詩」としての原義に復し、その表現方法である興詞に着目。そこに語られるもの・行為の呪術的意味と起原・生成について甲骨学・考証学・民俗学・宗教学を駆使して考究する。 9450円

研文出版

東京・神田神保町2-7 ☎3261-9337
http://www.kenbunshuppan.com/

は政治性を免れることができない。しかし、台湾で路易士が紀弦となつてからの、彼の「縦の継承」ではなく「横の移植」だとする「現代派運動」の主張は、まさに著者の考えるモダニズムの、ナショナルリズムからの主体的な「ずれ」の創出にほかならなかつた。言い換えればそれは、「移動」と「距離」という方法である。

そう考えてくるとき、『帝国』と「祖国」のはざまの著者の、「ナショナルリズム」が人々を強く支配した時代にあつて、むしろそうした国民国家の枠組みを脱しうる価値の創造を映画という芸術に求めること、それはたしかに「幻想」であつたかもしれない。しかし、植民地台湾でも、「帝国」日本の本国でも、「祖国」中国でも、当然には「国民」に統合されない、あるいは統合されまいとする劉呐鷗自身にとつては、ナショナルな枠組みを脱しうる価値の創造は、極めて切迫した要求だつたのでないだろうか」という論点は、さわめて示唆的である。

「上海モダニズム」とは、つまるところ「ピエロ」のようなものだ。「ピエロ」

とは「生活の圏外に外れてしまった人、弱者とすらいえないような、固有の場所を持たない人である」。そのことを集約的に論じたのが、「第六章文のかなたに何が見えるか——穆時英の選択」であり、「穆時英の文学活動と政治問題は、ほんとうに切断可能なのだろうか」という問いである。そこで鈴木氏は、「イデオロギー的な主張とは異なつた方法で政治に関与しようとした中国モダニズム思潮の運命を確認し、あわせてモダニズム思潮に生存の余地を残さなかつた二〇世紀中国文学の歩みを再検討したい」と述べている。そして、近代なるものの指標である「国民国家」への疑義と「越境」という問題が、最後に置かれた「第七章：対日文化協力者」の声——陶晶孫の屈折へと展開していくのである。中川成美『モダニティの想像力』（新曜社、二〇〇九）にならうなら、「モダニズムとは近代性の先端を担つたのではなく、そこから抜け出るためのレッスン」であり、「近代性に束縛された意識を解き放とう」と企て、「国民国家の版図を超えようとする

動態」であつた。鈴木氏のこの本の出版によつて、ポストコロニアリズムの視点から中国近現代文学を考える本格的な論考が、ようやく登場したというつよい思いがする。

（みきなおたけ 広島大学）

第3回国際シンポジウム

「中国語文法研究の新展望」

▼開催日：7月22日（日）9時半～18時（受付9時）▼場所：大東文化会館ホール（東武東上線東武練馬駅から徒歩4分）▼研究発表：古市友子「教本『官話急就篇』初版本と増訂版の比較」、何一薇「対外汉语『把』字句教学」、高橋弥守彦「中国語受身表現の体系について」▼講演：齐沪扬「与处所范畴相关的『把+O+V+R+L』构式」、周小兵「二语教学习得研究与汉语语法研究的互动」、三宅登之「アスペクトマーカーと図地分化——了、着の前景化と背景化的作用について——」、江蓝生「隐含义的显现与句法创新」